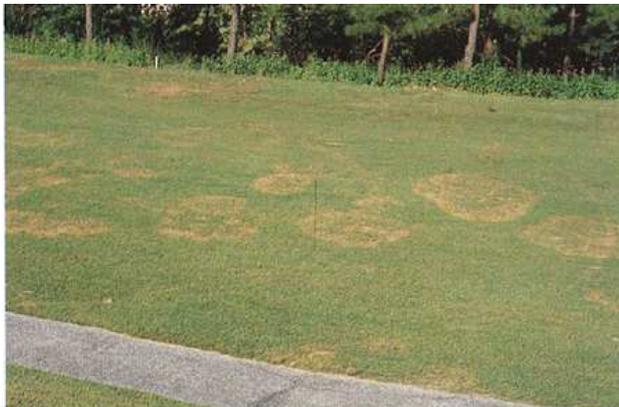


### 日本芝の重要病害：ラージパッチ

遠くの山が雪化粧し、年末に向けた慌ただしい時期となりました。今月の特集は日本芝の重要病害であるラージパッチです。季節外れの感こそあれ、毎年悩まされている方も多いのではないでしょうか。今年度の状態を振り返りながら、来年度のためにこの病害の特徴をみておきましょう。



↑日本芝に多発したラージパッチ(4月中旬) 「目で見えるゴルフ場の芝草病害」より



↑融合した様子(10月下旬) 同

日本芝及びバミューダグラスに発生する病害：ラージパッチは、別名・葉腐病（はぐされびょう）と呼ばれ、とてもよく目立つので重要病害の一つとされます。国内の多くの地域で発生しますが、東北以北と九州地方の一部では稀にしか発生せず、地域性のある病害でもあります。

一個体の病徴は、はじめ茎葉部分が水浸状になり、やがて全体が光沢を失います。その後羅病部の周りから上位の茎葉が赤褐色～茶褐色を示し、地際から抜けやすくなります。パッチは、春の萌芽時期に周囲より生育が著しく遅れ、発病時期にはやや緑色を残したまま灰白色水浸状になります。やがてパッチは広がり、融合拡大、赤褐色ないし茶褐色に変わり、パッチの内側は裸地化または環状・帯状に枯死します。

年2回発生し、春季は4月の上・中旬、秋季は10月上～下旬、気温が20℃前後になる時期に発生し始めると言われています。春季に発生すると6月中・下旬まで病勢が旺盛ですが、7月上旬からは自然治癒します。3月または9月に降雨が多いと発生が早まり、逆に9・10月に降雨が少ないと秋季には発生しないようです。秋季は休眠時期までパッチが拡大し、翌春にも引き続き拡大することがあります。



↑発生消長と薬剤防除適期 同

病原菌はカビの一種（担子菌類）であるリゾクトニア・ソラニー菌（*Rhizoctonia solani*）です。リゾクトニア菌は芝草だけでなく野菜類や花卉、材木なども侵しますが、病原菌自身にいくつかの系統があり、それにより被害を受ける作物の種類や病徴が違います。本菌は新しい有機物のみから栄養をとって繁殖し、黒褐色化した古い有機物では繁殖しないという特徴があります。また細菌や放線菌などが顕著に増殖すると衰退しやすくなるようです。

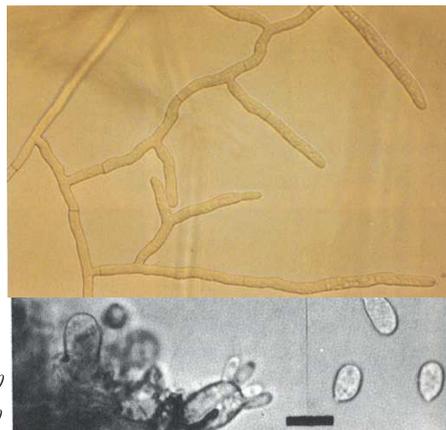
ラージパッチの病原菌となる型（AG-2-2(IV)）の発育最適温度は25～28℃ですが、地温が10～15℃になると急激に菌体密度が高くなり、芝草を侵害し始めます。病原菌の棲息は比較的表表面に近く、通常はサッチなどの植物残渣で腐生生活を営んでいるようです。羅病組織内ではほふく茎に潜在していると考えられています。

防除は、春季には病徴出現後のスポット処理で短期間にパッチが消失することもあります。秋季は芝草の回復力が弱くパッチ跡が残ります。激発する芝地にはスポット処理よりも発生初期（春）か発生直前（秋）の全面処理がよいとされます。

なおサッチ除去やバーチカルカットなどで芝草を損傷すると発病しやすくなるので、本病発生期間はそういった作業をできるだけ避けましょう。また本病は土壌伝染のほか人為的・機械的な接触伝染も確認されているので、芝刈機を発病地から他に移動する場合、高圧水による水洗いを十分に行うとよいでしょう。

(上)リゾクトニア属菌の菌糸。T字型細胞が特徴 「目で見えるゴルフ場の芝草病害」より

(下)リゾクトニア・ソラニー菌の担子柄と担子胞子 「芝草病害概説」より



## 製品紹介

パッチコロン水和剤

ラージパッチに低薬量で効果大



- 有効成分：シメコナゾール 20.0%
- 毒性：普通物
- 魚毒性：A類
- 原体メーカー：三共アグロ
- 包装：250g/袋、20袋入り/ケース

- 広い抗菌スペクトラムをもち、子のう菌類、担子菌類および不完全菌類の多くに抗菌活性を示します。
- 植物体への浸透性にも優れているので、治療効果もあります。
- 根部より吸収され、すばやく地上部に移行するので、散布時未展開だった上位葉の発病も抑えます。
- 蚕に対して影響があるので、周辺の桑葉にかからないよう注意してください。

作物名	適用病害名	使用時期	希釈倍率	希釈液散布量/10a
日本芝	葉腐病(ラージパッチ)	発病初期	4000倍	500L
	疑似葉腐病(春はげ症)		2000倍	250L~500L
	カーブラリア葉枯病、立枯病		800倍	200L
西洋芝 (ベントグラス)	葉腐病(ラージパッチ)		2000倍	250L
	ダラススポット病			
	炭疽病		2000倍	500L

## MONTHLY TOPICS

### 愛知目標 ~COP10で決まったこと~

生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が愛知県名古屋市にて2010年10月18日~29日の日程で開催されました。日本がホスト国だったこともあり大きな話題となりましたが、結局何が決まったのでしょうか?何しろ47もの決議があったので全貌を理解するのはなかなか大変ですが、そのうちの一つ、2020年までの計画を定めた「愛知目標」についてみておきましょう。



COP10のロゴマーク

#### ビジョン(展望)

この戦略計画のビジョンは、「自然と共生する」世界であり、すなわち「2050年までに、生物多様性が評価され、保全され、回復され、そして賢明に利用され、それによって生態系サービスが保持され、健全な地球が維持され、全ての人々に不可欠な恩恵が与えられる」世界である。

#### ミッション(使命) ※抜粋

2020年までに、生態系が強靱で基礎的なサービスを提供できるよう、生物多様性の損失を止めるために、実効的かつ緊急の行動を起こす。

愛知目標(愛知ターゲット、ポスト2010目標とも呼ばれます)とは、2002年のCOP6で採択された「2010年までに生物多様性の損失速度を顕著に減少させる」という「2010年目標」が残念ながら達成されなかったことを受けて採択された、この先10年の新しい目標のことです。愛知目標は、中長期目標としての「ビジョン」と2020年までの「ミッション」、そして5の戦略目標、20の個別目標にまとめられました(左参照)。

「ミッション」はもともと「2020年までに生物多様性の損失をゼロにする」とされるはずが、各国との交渉の末表現が弱められました。また「目標11」では、保護地域の数値目標として「陸地17%、海域10%」と定められましたが、これはNGOなどが求めていた数値に比べるとかなり「甘い」とされました。

とはいえ現在の日本国内で開発が制限されている保護地域は10%程度であり、海域に至っては1%未満とされています。今後は土地の利用制限がさらに進み、水産業にも大きな規制が敷かれていく可能性があります。水産業だけでなく、「目標7」では農業・養殖業・林業が行われる地域の生物多様性保全を確保する持続的管理を求めているほか、「目標8」では過剰栄養などによる汚染抑制が謳われるなど、多くの産業に影響が及ぶ内容となっています。

また「目標3」では、生物多様性に有害な政策(補助金などの奨励措置)は2020年までに廃止するとされています。すなわち、政府が真剣にこれに対応すれば、たとえ経済を活性化するためであっても生物多様性に有害であれば認められなくなる可能性があります。さらに「目標20」では資金動員の増強についても触れられていますが、いずれの国も財源が厳しく税金の投入が難しくなると、企業負担がより一層多く求められてくるかもしれません。

政府がこれらにどの程度向き合うかにもよるものの、世界が生物多様性保全に向けて動き出していることは確かです。これらを念頭に、「これから」を考えていきましょう。

参考:環境省H22.11.2報道発表資料「生物多様性条約第10回締約国会議の結果について」 <http://www.env.go.jp/>

愛知目標概訳(環境省) [http://www.env.go.jp/press/file\\_view.php?serial=16471&hou\\_id=13104](http://www.env.go.jp/press/file_view.php?serial=16471&hou_id=13104)

愛知ターゲットが企業に突きつける課題(ECOJAPAN) <http://eco.nikkeibp.co.jp/article/column/20101109/105219/>

取扱い・お問合せは—

緑を育み、未来へつなぐ

 株式会社 サカイグリーン

〒930-0171 富山県富山市野々上150番地  
TEL:076-434-0036 FAX:076-434-4968